

「令和5年度 第2回 向日市いじめ防止対策推進委員会」

1 日 時 令和6年2月8日（木）午後1時30分から同3時まで

2 場 所 乙訓総合庁舎1階第2会議室

3 出席者 委員長 本間 友巳 大学教授
副委員長 平 正博 弁護士
委員 荒井久美子 臨床心理士
若林 麻記子 医師・・・欠席
北口 雄一 臨床心理士・・・欠席

4 内 容

(1) 令和5年度のいじめ調査の結果の概要について

【1回目の追跡のいじめ調査の結果】

- ・認知件数 小学校607件、中学校93件、小中合計年間 700件
- ・未解消件数 小学校 34件、中学校22件、小中合計年間 56件
- ・解消件数 小学校573件、中学校71件、小中合計年間 644件

【2回目のいじめ調査の結果】

- ・認知件数 小学校534件、中学校92件、小中合計年間 626件
- ・未解消件数 小学校526件、中学校92件、小中合計年間 618件
- ・解消件数 小学校 8件、中学校 0件、小中合計年間 8件

【学年別認知件数の傾向】

・小中学校ともに学年が上がるにしたがって減少する傾向にあるが、今年度は、中学1年生に増加傾向が見られる。小学校の高学年や中学生は、認知件数が少ないため、教員と児童生徒との信頼関係づくりや、教員による休み時間における児童生徒の過ごし方等の観察、また、個別の一層丁寧な聞き取りに努める。

【認知されたいじめの態様】

・小学校では、「冷やかしゃからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる」、「軽くぶつかられたり、遊ぶふりをしてたたかれたり、蹴られたりする」、「嫌なことや恥ずかしいこと、危険なことをされたりさせられたりする」が、中学校では、「冷やかしゃからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる」、「軽くぶつかられたり、遊ぶふりをしてたたかれたり、蹴られたりする」が、いじめの態様の中で多くを占めている。

(2) 委員からの助言等

(委員) 令和4年度と比較して、令和5年度は中学校1年生の認知件数が増加しているが、何か理由があるのか。

(事務局) 認知件数が増加している中学校1年生に、何かの特別な理由があるわけではない。それぞれの態様を調べると、悪口や軽微な暴力等が多いことがわかった。認知数の多さについては、学校が児童生徒の思いを丁寧に把握し、普段から積極的に認知し、早期対応を行っている結果であると考えている。ただし、いやな思いをしている児童生徒がいる表れでもあるので、一つ一つの事例に丁寧に対応し、継続的な見守りを続けていくよう指導しているところである。

(委員) いじめの原因についてはいろいろあると思う。児童同士や生徒同士以外のいじめについても認知しているのか。

(事務局) いじめ調査については、児童生徒が児童同士や生徒同士でのいじめについて答えるケースがほとんどだが、中にはきょうだいや学外の人間関係等についての嫌な思いを答える児童生徒もいる。その場合でも、本人からの話を聞き、保護者や関係者と連携を図りながら問題解決に取り組んでいる。

(委員) いじめの状況は様々である。児童生徒の思いに寄り添いながら、学校での児童生徒関係だけにとどまらず、いろいろなケースのいじめについてもきちんと話を聞くことが大切である。

(委員) いじめ調査ができなかった未調査の児童生徒はいるのか。その児童生徒がどのような状況かを把握しているのか。

(事務局) 各小中学校で、数人の児童生徒が未調査として挙げられている。例えば、不登校児童生徒の中でも、本人や保護者が精神的に不安定で、いじめ調査についての話をすることが難しい場合は未調査となっている。また、フリースクールやインターナショナルスクールなどに通学している児童生徒も未調査として挙げられている。不登校でも、本人や保護者と連携が図れる場合は、いじめについての有無や本人の思いを把握するよう努めている。

(委員) 不登校の原因がいじめであったということを、本人があとから話すことも全国的には少なくない。本人や保護者と連携を図ることが難しいこともあると思うが、引き続き連携をとる努力をしてほしい。